

婦人のための情報誌

6号

ねとわあく



目次

特集 変わりつつある男女の性別役割意識.....	2
◇女の子はつくられる.....	2
◇わが家の男女平等教育.....	4
◇女子高校生へのアンケート.....	6
◇性別役割意識の見直し.....	8
ティータム.....	9
はじめまして.....	10
◇トップインタビュー.....	10
◇グループ情報.....	12
海外スポット・日米女性事情.....	13
婦人のための静岡県計画レポート.....	14
こだま・読者の声.....	15
本の紹介.....	15
あとがきにかえて.....	16



静岡県

変わりつつある男女の性別役割意識

……女らしさ・男らしさ……人間らしさとは……

ピーターパンをご存知でしょうか。あのウォルト・ディズニーのマンガでおなじみの、永遠に大人にならない主人公の少年です。

近年、アメリカの女たちは、大人になれない（なろうとしない）男たちを、女性の自立の足を引っばるという意を込めて、ピーターパンと呼ぶのだそうです。

自分の身のまわりのことが自分でできない男、仕事の都合で妻との約束を簡単に反故にする男、仕事以外に自分の生活を持っていない男、彼らはみんなピーターパン即ち、大人の男ではない、というわけです。

私たちが長い間、自明の理としてきた、大人らしさ、女らしさ、男らしさのイメージは、実は、文化により、さらに、世代により、ずい分異なった内容を持っているのです。

人間は、生まれた時から女（男）らしさが組み込まれているわけではなく、しつけられて、そのような女（男）に育つと言わねばなりません。

何もかも急速に変化を続ける現代にあつて、親が子どもに、理想の女性（男性）像を示しにくい時代でもあります。

そこで、親である私たち自身の意識を確かめながら、性別役割意識を形づくるしつけについて考えてみました。

「特別寄稿」

女の子はつくられる

朝日新聞記者 佐藤洋子

東京のある区の、「中学生の主張」作文審査をする機会があった。

昨年の秋のことだった。百編の作文を読むのは大変なことだったが、大変さを超えて、この役割は、とても楽しかった。とかく「問題」とされる今の中学生たちが、日頃どんなことを考えているかを知ることが出来るからだだった。

中に「自立」と題する作文が数編あったが、とりわけ、二つの作文が印象に残った。

ひとつは父親の単身赴任をきっかけに、家族が家事へ目を向け、みんなが変って行く姿を書いたもの。もう一編は、共働き家庭で食

事を分担している少女の作文だった。

二編に共通しているのは、子ども達は男女二人の「きょうだい」にもかかわらず平等に家事に参加している点だ。前者はこう書く。

「兄も私も初体験だし、二人とも学生（略）、立場が同じなのだから、世間では女が家事をしなければならぬとか、するのが当然と思われがちですが、わが家の場合平等に分担して今でもそうしています」

後者の共働き家庭の少女はこう書く。

「弟といっしょに夕食をたべたら、後片づけは弟です。（略）自*



原田 燿造 さん（浜松市・わかき保育園）

バレーボールで鍛えたガッチリした体格。楽器・絵画何でもこなすスーパーお父さん。保父の資格を取って以来、幼児教育に情熱を注いでいる。



静岡大学卒業式
59・3人文学部代表・松村満理さん



小学校の家庭科授業風景

*分のことが出来ない、他の人を助けることが出来てきません」
母親が働いていようといまいと、親の対応の仕方によっては、家庭内で、このような思考や観察の目を育て上げることができると、誠に頼もしく思った。

私たちの身の回りには、何と沢山の「常識」といわれるものがありまいていことだらう。

「家事は女がやるもの」「男の子は強いのだから泣いてはダメ」「女の子だから手助けしない」「男だから一生懸命勉強しなさい」などなど。

時に、私たちは、そうした言葉が世間常識とされているために、自分たちも口からふいと言葉にして出していることがある。

しかし、ここに挙げた言葉の「男」とか「女」とかに当る部分を入れかえて口に出していつてみたい。すると、不思議な世界が見えて来るような気がする。

たとえば、私の息子が小さかった頃、道路でころぶ。すると、通りがかりのおばあさんまでも、「泣かないのね、偉いわね、男の子ですものね」と励ましてくれる。その励ましを有難いと思いつつ、何度、私は心の中で「では、女の子

は、ころんだら、泣いてもいいのだろうか。何かをこらえなければならぬという試練は、男にとっても女にとっても、同じように必要なのはなの」と思ったかしれない。

こうした男女観に根差す「常識」や言葉は、日常生活に深く入りこんでいるだけに、かえって根深い問題をはらんでいるように思う。

男だから、女だから、というつい口にしがちな言葉を消して物事を考えるくせをつけられ、冒頭に挙げたような子どもを育て上げることが可能なのだと思う。

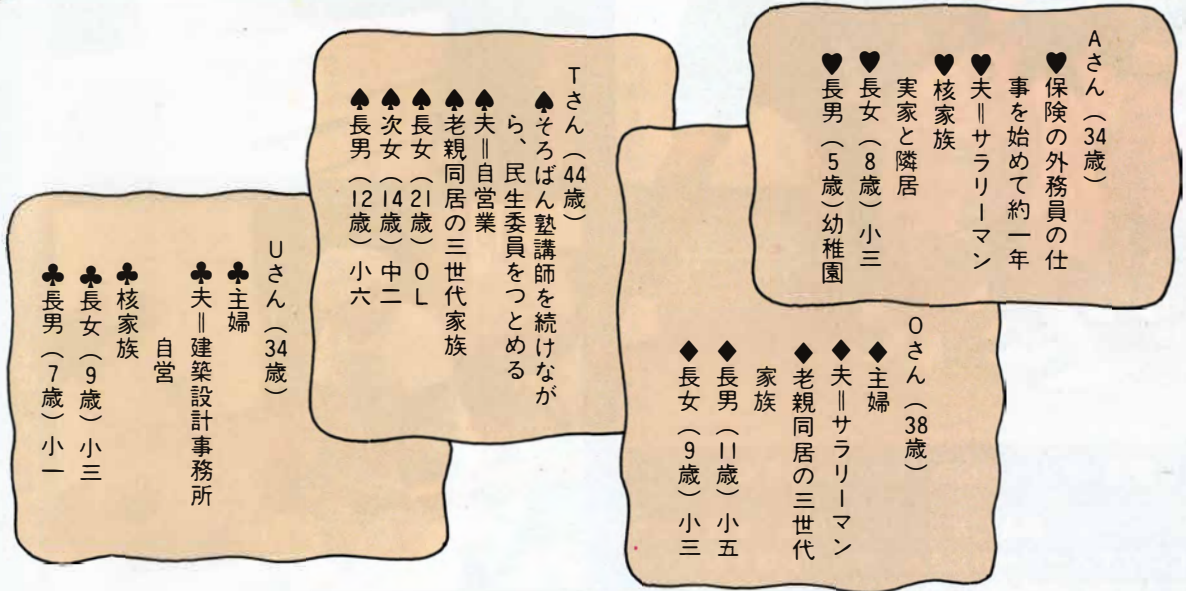
女が女としてつくり上げられている背後には、男もまた男としてつくり上げられて行く常識・慣習が横たわっている。

大人が、つまらない男女観を捨てた時、この少女たちは、男とか女とかにとらわれない「人間」に共通する豊かな言葉で、次のように作文の最後を結ぶのである。

「自立するということは、自分でできることが増え、他人のことを気づかう心が豊かになることだ」と思います」

筆者プロフィール
昭和十一年生まれ
国連婦人の十年中間年世界会議に
朝日新聞特派員として参加。

我が家の男女平等教育



生まれたばかりの赤ちゃんは、

真白なキャンバスに譬えられます。

そして、子は親の背中を見て育つとも言われています。

女性の生き方、家族の中の人間関係が変化しつつある現在、親にとって、子どものしつけは難しい局面を迎えています。

師走のお忙しい時期、四人のお母さん方にお集まりいただき、ざつぐばらんに話し合ってもらいました。編集部では、いわゆるニューファミリーと呼ばれる若い層の家族に、新しいしつけの方向を期待したのです。

ればいけないだよ」と、とても思いやりがあります。

♥ 性格はつくられるとよく言われますけど、やさしさとか、思いやりとか、半分はもって生まれた性格というものがあるように思います。

♠ うちでは、同じ女の子でも長女は剣道が好きで外向的、次女はとても家庭的で、料理やお菓子づくりが好きです。

♣ 男・女という違いではなく、きょうだいの生まれた順序で育て方が自然に変ってくるということはあるみたいで、それが性格に反映するのかもしれないですね。

◆ 習い事も、長男・長女とも同じようにさせていますし、小さい時から、食後の食器は、自分で流しに持って行くようにしました。

♣ 夫は「男の子はお皿を運んだり、洗うことなどしなくていい」と言うんですが、私は二人に同じように手伝わせています。

♥ 今の時代、男の子だって身のまわりのことぐらい自分でやれないとこまるのではないかしら。

みなさんどんなご夫婦ですか？

♣ 友達がそのまま夫婦になって、そ

◆ 子どもの性格としつけ
 うちでは、男女の分けへだてないように育てたつもりですけど、長男の方が優しい性格で、ケーキを作ったり、クッキーを焼いたりするのが好きなんですよ。

♣ うちでも7歳の長男は、小さなおまんじゅう一つでも「お姉ちゃんと半分ずつにする」と言うんですが、長女の方はひとりで食べてしまいます。

それに、長女は嫌いなものは嫌いとはつきりと言いますが、弟の方は「嫌いでも有がしう」と言わなけ

の中に子どもが加わってきた、という感じです。

自宅と仕事をする場所が同じなものですから、夫は子どものことはよく気がついていろいろ手伝ってくれます。ただ、近頃、育て方に對しての考え方が、ちよつと食い違ふようになってきたみたい。

うちは典型的な亭主関白だと思います。長女が小学校に入ってから私は働き出したんですが、夫はまだまだ洗濯機も使えないんです。夫の生家が石川県の旧家で、家族は父親を三ツ指ついて送り迎えをしたということですから、育つた家庭の影響もあるんじゃないでしょうか。

夫の両親と同居ということで、まづ家の中がうまくいけばいい……と思つて、自分の意見はなるべく抑えるようにしているんです。夫は家の中のことは何もしない人で……不満ですね。

◆ 一軒の家の中では、誰かが我慢しなければね。

私も大事なことの決定は、やはり夫にまかせるようにしています。

◆ 子どもの将来への期待は？

◆ 長男には、収入の安定した職業についてほしいですね。長女には、料理や洗濯が好きで思いやりのあ

る人になつてほしいのは勿論です。一生続けられるような仕事を見つけてほしいと思つていて、そのためには、私自身が働いている姿を見せるべきだとは思つてゐるんですが――。

◆ 私が始めた反動からか、長女は家庭的なことが好きになつたようです。一時はお勤めをしても、いいお嫁さんになつてくれればいいと思つています。

長男には、サラリーマンではなく、手に職をつけてほしいと思つてゐます。

◆ 長女は、短大を出たあと東京で外資系の会社に勤めましたが、仕事は男性と同じでなかなか厳しく、結局身体をこわしてしまいました。親の身としては、家へ帰つてきて結婚する気になつてほしいのですが、やはり、女の幸せはいい家庭を築くことだと思いますので。

長男の方は、本人次第ですが、できれば家業を継いでくれるかと思つてゐます。

◆ 親が中小企業に勤めて苦勞を体験していますので、長男には公務員などがいいと思つてゐます。

長女の方は、平凡な主婦に落ちついてくれればいいのでは――。

座談会を終えて

幼少年時代は、男女の差をつけずに育てたつもり、という家庭は多いようです。

実際に育てている母親の眼から見ても、女の子が必ずしも家庭的で優しく、男の子が外向的で強いとは言えない、と話していることから分かるように、性格・性向の違いは、性差ではなく、個人差だと考えたいところです。

しかし、子どもの将来に對しては、男女でかなり期待の内容が違つてゐます。女の子には幸せな結婚を、男の子には経済上の稼ぎ手としての期待が大きいのに、改めて考えさせられました。

しつけというのは、かくあるべしという将来の展望を持つて養育することだと思いますので、平等にと心がけながらも、実際には、どこかの時点で、現実にも引きもどされ、男女別々のしつけへと傾斜していつてしまうのでしょうか。

特に、競争社会の厳しい現実に身を置いている父親は、より強い男を息子に期待し、娘には、一見自由な選択を許す反面、最終的には、良い結婚に期待をかけているのが平均的な姿と言えそうです。

女性にとって、職業と家庭の両

立が、よほどの好条件下でないとなかなか現状では、親の考え方としてはやむを得ないのかもしれない。

ここには、常に指摘されるように、鶏が先か、卵が先か、という問題が横たわつており、この悪循環を断ち切らないことには、本当の意味で、男女平等教育は難しいと言わざるを得ません。

我が家は、同い歳の夫婦と娘ひとりの核家族、世間並みに仕事優先の夫と、兼業主婦の組合せです。小学生の娘には、自立への意を込めて、『起』の字を使い、美起と名づけました。

父親は、学校へのアンケートにこう答えています。……優しさ、強さ、包容力、決断力を合せ持つて、自分の意見をはっきり言い、リーダーシップの取れる子に……。やっぱり我が家も期待過剰過ぎみ。ただ、どこかの段階で、結婚までではなく生涯を通しての職業観を身につけさせたいと思つてゐます。十数年後、今の子ども達が大人になる頃、男も女も、家庭と仕事に等しく参加できる道が拓けているか、あるいは今よりもっと難しくなっているか、前者であることを見守りたいと思つてゐます。